
黄色い帽子

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄色い帽子

【Nコード】

N0281Z

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

あらゆるものが人民のものであり人民こそが国の主役であるという素晴らしい思想を掲げる国家が誕生した。その思想は亜細亜の一国にも伝わりその国の知識人達を魅了した。だがその思想の正体、思想に染まった知識人の有様は。我が国の戦後の進歩的知識人を書かせてもらいました。残念ですが事実をもとにしています。

第一章

黄色い帽子

そのイデオロギーの象徴は黄色だった。何故黄色かというと。

「人民が働く肉の色だ」

だかららしい。それでだ。

そのイデオロギーにおいてはだ。黄色、そして身体を使う働く者、即ち権力にないと考えられる者が正義と考えられたのである。

その彼等の主張は。

「人民が正義だ」

「人民が絶対だ」

「貧しいことがいいのだ」

「金持ちは悪だ」

こうした思想であつた。そしてだ。

この思想は忽ち福音の様になつた。欧州の知識人達に広まつた。そうしてそうした人民が政治を治める国が本当に実現すると思われるようになった。

そしてだ。それは。

亜細亜の一国にも伝わりだ。

彼等の間でもだ。まさに信仰となつた。

「この思想でこの国は変わるんだ」

「人民を搾取する金持ちは悪だ」

「今の政府は間違つていゝるんだ」

「人民の国にするんだ」

「あの国の様に」

丁度革命でだ。ある大国がそのイデオロギーの国になつたのだ。

この国の知識人達にもだ。当然ながらこのことは伝わっていた。

そしてだ。彼等はさらに叫んだ。

「あの国に続くんだ」

「不況も餓えもないらしいぞ」

「そして人民が主権者なんだ」

「人民が治め人民が暮らしている国なんだ」

「金持ちはいないんだ」

「理想の国だ」

こう口々に言っただ。しかも。

「あの思想が平和をもたらす」

「彼等はいつも平和を言っているじゃないか」

「平和勢力だ」

「あの思想で人類は平和になれるんだ」

「幸せになれるんだ」

人民が治め一つになることだ。平和が訪れるということになったのだ。

それでだ。その思想はだ。

この国の知識人達を支配した。だがだ。

この国と大国は元々仲が悪くだ。大国で革命が起こってもそれは変わらなかった。むしろだ。大国はこのイデオロギーを使ってだ。

この国に侵略しようと考えていた。この国の政府もそれを察してだ。

手を打ってきた。警察を使ってイデオロギーを取り締まりだしたのだ。

「あの連中は作員だ」

「革命とは名前ばかりだぞ」

「人民が支配している国じゃない」

「あの国の独裁者が支配している国だ」

「若しあの国の工作を許せば国が乗っ取られる」

彼等はこのことがわかっていた。

「そして革命に反対するという理由で多くの人間が殺される」

「人民が主権者なら人民の敵とみなされればどうなる」

「あの国もあの首長も危険だ」

「我が国に入るのを許すな」

こうしてだ。この思想は徹底的に取り締られることになった。しかした。

危険視される側はだ。こう言うのだった。

「言論弾圧だ！」

「政府の言論統制だ！」

「反動だ！」

「権力者の横暴だ！」

こう言っただ。地下に潜ってでも活動を続けるのだった。そうしてだ。

やがて戦争が起こった。世界各国がそれぞれの陣営に加わり世界規模の戦いをはじめた。その中にだ。この国と大国も加わった。

互いに敵対する立場だった。大国は多くの軍を出した。その軍は戦い方は獯猛と言ってもよかった。そして戦争の後でだ。噂が出た。

「略奪が酷い!?!」

「虐殺を行う!?!」

「婦女子への暴行が目に残るだ」と

「懲罰大隊!?!何だそれは」

とりわけだ。この国の誰もが聞いたことのない部隊の名前に注目された。

その部隊はだ。こうした部隊だった。

「犯罪者とみなされた人間が入れられてか」

「地雷原を歩かされたり戦車の盾になっただか」

「真っ先に突撃させられる」

「消耗品か」

「少しでも退けば後ろから味方に撃たれる」

「そんな部隊があるのか」

このことを聞いてだ。多くの者が驚いた。

第二章

「聞いたこともない話だな」

「あの国ではそんな非道が許されるのか」

「政治将校という党員に睨まれば終わりか」

「そうした部隊か」

「しかもだ。正規軍もだ。」

黄色いベレー帽やヘルメットの彼等はだ。進軍の先々であった。

「幼女を集団で暴行してか」

「その幼女はもう二度と立てないらしいな」

「奴等が通った先では暴行され自殺した婦人の死体で川が埋まっ
ているらしいぞ」

「とにかく手当たり次第に襲うらしい」

「少しでも逆らえば虐殺だ」

恐ろしい噂が次々と出て来ていた。

「何でも奪い壊し」

「殺していく」

「それが平和勢力の軍隊なのか」

「とんでもない奴等だぞ」

この国も大国と戦っていた。それで情報が伝わっていたのだ。実
際にだ。占領地ではそうしたことが日常的に行われていた。

この国は敗れた。大国にも多くの領土を奪われた。そこから逃げ
延びた人達の証言もだ。噂を実証するものばかりであった。

「婦女子は頭を丸めて逃げないといけなかったのか」

「民間人でも容赦なしだと」

「しかも捕虜は極寒の地で強制労働か」

「そんな国か」

「何という奴等だ」

完全にだ。大国、そしてその主義の実態が知れ渡ってしまった。

「独裁者の国だ」

「肅清や弾圧が日常化している」

「党員が全てを支配しているんだ」

「そんな国だ」

「自由はない」

「人民が主役ではない」

「言っていることとは全然違う国だ」

こう見なされた。だが、だ。

知識人達はだ。大国に招待され貴族達も口にしたことのない美酒と美食を御馳走されオペラや芸術、それに人民と称する役者達の芝居を見させられてだ。口々に言うのだった。

「いや、素晴らしい国だ」

「軍の規律もいい」

「平和を愛しているんだ」

「そういう国なんだ」

こう言うのだった。

「戦争中の話は全て嘘だ」

「そうだ、捏造だ」

「あの国はそんなことをしない」

「絶対にだ」

根拠なくだ。しかも事実を知ったうえで言葉だった。

「帝国主義者達の悪質なプロパガンダに惑わされるな」

「事実の一つだ」

これは確かにその通りの言葉ではあった。

「あの国のあのイデオロギーが世界を平和にする」

「その時が今近付いてきているんだ」

こうだ。彼等は吹聴し続ける。あくまでだ。

事実、それも恐ろしいものが次々に出て来る。独裁者が死にだ。おぞましい肅清や弾圧の事実がその大国自身から出てもだった。「あの独裁者個人の問題だ」

「それに過ぎない」

その独裁者をついこの前まで偉大な革命家だの子供好きの親父さんだの言っていたその口でだ。平然と言ってしまふ彼等だった。

「それがわかっていないのか」

「あの大国の政治的土壌でああなっ たんだ」

「あくまでイデオロギーの問題じゃない」

「あのイデオロギーには何の問題もない」

「平和と人権のイデオロギーだ」

「それに対してこの国はどうだ」

論理のすり替えだった。明らかに。

彼等の祖国についてのだ。的外れな攻撃を誤魔化しにかかったのだ。

第三章

「この国は自由がない」

「しかもあの戦争で悪事を重ねた」

「悪はこの国だったんだ」

「この国が何かを言う資格があるのか」

露骨にだ。異論への脅しもしてきた。

「あの国は違う」

「寛容なあのイデオロギーには何の問題もない」

「人民は正義だ」

「絶対の正義だ」

こう言っただ。あくまで韜晦に務めてだ。そのイデオロギーへの疑念を打ち消したのだった。そうしてそのまま進んでいくのだった。だが、だ。やはり世界は事実を見せていく。それこそ三十年はこつした知識人達の無意味な韜晦、しかも有害極まるそれは続いた。

だが、だ。その大国自体がだった。

その窮乏とだ。経済破綻が明らかになった。それから早かった。国家自体が解体していく。それと共にだ。

イデオロギーの欠陥自体がだ。その大国に認められたのだ。

これに対してだ。多くの者がわかった。

「人民が主役とか嘘だったんだな」

「党員である官僚や秘密警察が支配する国か」

「言論の自由は一切ない」

「強制収容所の国か」

「言論弾圧に異民族の弾圧」

「誰もが平和で幸せな国じゃなかった」

「しかもその平和も」

『平和勢力』という看板にもだ。バツがつけられた。

「必要とあらば戦争をしてたじゃないか」

「ああ、野心から他国に攻め込んでたな」

「あの砂漠の国で失敗してたな」

「何だ？学者連中の言っていたことは全部嘘だったのか」

「奴等は嘘吐きだったのかよ」

「新聞もテレビも」

「全部嘘を言っていたのか」

この国のメディアや知識人達の実態もここでわかったのだった。

そうしてだ。大国の崩壊は実際に起こりだ。黄色い帽子は。

脱ぎ捨てられた。そうして黄色い旗と共に燃やされた。これで全てははつきりした。

大国実態もわかりだ。止めになった。これでこのイデオロギーは終わったとだ。殆どどの者が確信した。いや、全てと言ってよかった。

だが、だ。大国を支持、いや媚び諂い賛美してあわよくば彼等のお零れを狙っていた者達は生き残った。その彼等はいつと。

第四章

平然とだ。看板だけを換えてだ。

マスメディア、そして学会に残りだ。政治家としてもだ。

残り続けた。ただ言葉と政党の名前が変わっただけだった。そうしてだ。

「格差社会だ！」

「我が国は孤立している！」

「世界市民だ！」

こう主張しだしたのだ。そしてだ。

テレビだけを信じている者達はだ。そうした言葉を鵜呑みにしてだ。

彼等の旗に隠されているものにもだ。気付かなかった。

ここでもだ。心ある者達はだ。その名前を変えた勢力の旗を見て言った。

「黄色いじゃないか」

「あのイデオロギーの色だぞ」

「連中は全然変わっていなかった」

「それが見えているんだよ」

「あの連中の言うことは聞くな」

「絶対に選挙で票を入れるな」

「入れたら大変なことになる」

心ある者達は口々に言う。しかしだ。

かつてあの大国を知る者は減りだ。若かりし日にそのメディアや知識人達の垂れ流す主張をそのまま聞いていてだ。戦争を知らなかつた面々がだ。テレビだけを見てだ。

「いや、一回あの政党に任せてみよう」

「メディアは嘘を言わない」

「一回与党にお灸を据えよう」

「しかも言っていることはよくないか？」

「格差社会も外交的孤立も解決しないと」

そのままだ。事実を一切勉強せずにただメディアや知識人、しかもかつての彼等の発言や文章も全く調べずにだ。彼等は能天気と言いだ。

彼等の言うままだ。その政党を支持し票を入れてだ。

黄色い時代が来た。そして。

この国は未曾有の危機に陥った。それで勉強しなかった彼等は叫んだ。

「こんな筈では！」

「こんな筈ではなかった！」

「何でこうなった！」

こう叫び喚きだした。しかしだ。

彼等はだ。忠告してきた者達にだ。黄色い帽子を無理矢理被せられてだ。

「黄色い奴等を許すな！」

「御前等全員何処かに消えろ！」

「マスコミも学者と一緒にだ！」

「俺達が革命を起こしてやる！」

「人民なんているか！」

「御前等はいるか！」

こう言っただった。黄色い帽子を一生被せられてだ。

死ぬまで罵られ後ろから蹴られ侮蔑された。それから黄色い帽子はだ。

この国では災厄の象徴になった。黄色という色もだ。

そのこと自体が悪になりだった。最早。

邪教の如き扱いとなった。そして。

黄色い帽子をはめられた者達はだ。今度はだ。

「市民主義だ！」

「市民の時代だ！」

僅かに残ったメディアや知識人、そして彼等と同じ思想の市民団体や組合の主張に耳を傾けていた。彼等はあくまでわからなかった。そのうえでまた言うのであった。

「弱者救済だ！」

「庶民の味方だ！」

「庶民目線の政治！」

「これからはそれだ！」

今度もだ。その旗振りをしているのは。

いつもの新聞、にテレビだが。彼等は気付いていなかった。

それでだ。彼等は煽られてだった。

またしてもだ。騒ぎそうしていた。だが。

流石にだ。彼等も少数になっていた。寿命で死んだ者もいてネットがさらに普及していつていてだ。力が弱まっていたのだ。

それでだ。騒いでいる面々は。

誰からも相手にされなくなった。新聞もテレビも観る者は少なくなっていた。

そしてだ。煽られている者達は。

孤立して騒ぎ喚くだけで。殆んど相手にされなくなり。

孤立した中でだ。喚き続けていた。

「何故誰も俺達に賛同しない！」

「こんな筈じゃない！」

「こんな筈じゃなかった！」

こんなことを喚くが最早無力になっていた。時代は変わっていた。だがそれに気付かない者が喚いているだけになっていた。黄色い帽子は最早道に捨てられ踏みつけられるかだ。愚か者だけが被るものになっていた。

2
0
1
1
·
9
·
2

第四章

平然とだ。看板だけを換えてだ。

マスメディア、そして学会に残りだ。政治家としてもだ。

残り続けた。ただ言葉と政党の名前が変わっただけだった。そうしてだ。

「格差社会だ！」

「我が国は孤立している！」

「世界市民だ！」

こう主張しだしたのだ。そしてだ。

テレビだけを信じている者達はだ。そうした言葉を鵜呑みにしてだ。

彼等の旗に隠されているものにもだ。気付かなかった。

ここでもだ。心ある者達はだ。その名前を変えた勢力の旗を見て言った。

「黄色いじゃないか」

「あのイデオロギーの色だぞ」

「連中は全然変わっていなかった」

「それが見えているんだよ」

「あの連中の言うことは聞くな」

「絶対に選挙で票を入れるな」

「入れたら大変なことになる」

心ある者達は口々に言う。しかしだ。

かつてあの大国を知る者は減りだ。若かりし日にそのメディアや知識人達の垂れ流す主張をそのまま聞いていてだ。戦争を知らなかつた面々がだ。テレビだけを見てだ。

「いや、一回あの政党に任せてみよう」

「メディアは嘘を言わない」

「一回与党にお灸を据えよう」

「しかも言っていることはよくないか？」

「格差社会も外交的孤立も解決しないとな」

そのままだ。事実を一切勉強せずにただメディアや知識人、しかもかつての彼等の発言や文章も全く調べずにだ。彼等は能天気と言いだ。

彼等の言うままだ。その政党を支持し票を入れてだ。

黄色い時代が来た。そして。

この国は未曾有の危機に陥った。それで勉強しなかった彼等は叫んだ。

「こんな筈では！」

「こんな筈ではなかった！」

「何でこうなった！」

こう叫び喚きだした。しかしだ。

彼等はだ。忠告してきた者達にだ。黄色い帽子を無理矢理被せられてだ。

「黄色い奴等を許すな！」

「御前等全員何処かに消えろ！」

「マスコミも学者と一緒にだ！」

「俺達が革命を起こしてやる！」

「人民なんているか！」

「御前等はいるか！」

こう言っただった。黄色い帽子を一生被せられてだ。

死ぬまで罵られ後ろから蹴られ侮蔑された。それから黄色い帽子はだ。

この国では災厄の象徴になった。黄色という色もだ。

そのこと自体が悪になりだった。最早。

邪教の如き扱いとなった。そして。

黄色い帽子をはめられた者達はだ。今度はだ。

「市民主義だ！」

「市民の時代だ！」

僅かに残ったメディアや知識人、そして彼等と同じ思想の市民団体や組合の主張に耳を傾けていた。彼等はあくまでわからなかった。そのうえでまた言うのであった。

「弱者救済だ！」

「庶民の味方だ！」

「庶民目線の政治！」

「これからはそれだ！」

今度もだ。その旗振りをしているのは。

いつもの新聞、にテレビだが。彼等は気付いていなかった。

それでだ。彼等は煽られてだった。

またしてもだ。騒ぎそうしていた。だが。

流石にだ。彼等も少数になっていた。寿命で死んだ者もいてネットがさらに普及していつていてだ。力が弱まっていたのだ。

それでだ。騒いでいる面々は。

誰からも相手にされなくなった。新聞もテレビも観る者は少なくなっていた。

そしてだ。煽られている者達は。

孤立して騒ぎ喚くだけで。殆んど相手にされなくなり。

孤立した中でだ。喚き続けていた。

「何故誰も俺達に賛同しない！」

「こんな筈じゃない！」

「こんな筈じゃなかった！」

こんなことを喚くが最早無力になっていた。時代は変わっていた。だがそれに気付かない者が喚いているだけになっていた。黄色い帽子は最早道に捨てられ踏みつけられるかだ。愚か者だけが被るものになっていた。

2
0
1
1
·
9
·
2

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0281z/>

黄色い帽子

2011年12月1日01時48分発行